

# まで見逃せない！こまれた映画です

フランス王妃マリー・アントワネットとも親交があったジョージアナは、18世紀イギリスのファッショニーリーダーだった。

映画では主演のキーラ・ナイトレイが次々と身に着ける30点以上のドレスや、高さ1mに達するカツラ、次第に濃く、印象的になっていくメイクなどが見どころ。また、ロケーションは本物の貴族のカントリー・ハウスで行うなど、18世紀の貴族社会を忠実に再現している。



- ①ジョージアナが10代のころはフランス風の衣装が大ブーム。当時の女性の中には、コルセットでウエストを40cmまで締め上げ、骨が変形する人もいた。  
②政治活動をするジョージアナのファッションは連日新聞などに取り上げられ、流行を生んでいった。  
③フランス革命後は、体を締め付けない、胸の下が広がったドレスや、カシミアのストールが流行した。

## 正確な時代考証で 18世紀の 貴族の暮らし が浮かび上がる



お酒だけでなく、ギャンブルも大好きだったというジョージアナ。映画には優雅な賭け事のシーンも多い。



重厚なカントリー・ハウスを背景に遊ぶ若い貴族の子息、令嬢の姿は、まるで名画のように美しい。

## ロケ地は ジョージアナが実際に過ごした館など

撮影は公爵夫妻が生活したチャッツワース・ハウスをはじめ、現存する歴史的カントリー・ハウスで行なわれた。キーラ・ナイトレイいわく「あの屋敷にいるだけで、大きな違いが生まれる。当時の人々の暮らしのスケール、彼らの存在した感覚を実感できるの」

「ジョージアナが保養に出かけるバースの三日月型の建物に注目を。当時の超人気スポットです」（中野さん）

大型犬がテーブルの周りをうろつき、罵り合う公爵夫妻の間に無表情の召使が控える…。21世紀では考えられないことも、18世紀の貴族の暮らしではごく当たり前の光景。

「冒頭に黒人の召使が登場します。さりげなく当時の黒人奴隸売買とその後の終局を盛り込んでいて、感心しました」（小林さん）「パーティーシーンで印象的だったのがシャンデリアの炎。当時はドレスに火が燃え移って焼死した人もいたそうです。リアリティがありました」（中野さん）

## 濃厚な愛憎劇を繰り広げるのはこの4人



チャールズ・グレイ  
(ドミニク・クーパー)

レディ・エリザベス・フォスター  
(ヘイレイ・アトウェル)

デヴォンシャー公爵  
(ラルフ・フィネス)

ジョージアナ・スペンサー  
(キーラ・ナイトレイ)

### 女と女の関係の限界値を 描いた想像を絶するドラマ！

主人公・ジョージアナと、子孫にあたる

故ダイアナ元妃を重ねてみると、ジョージアナの方がより、すごい、ことに耐えていきますよね。それは、夫が単に愛人を作る…ということだけでなく、その愛人が自分の親友であり、しかも同居するということ。私は、絶対に耐えられません。

ただ、愛人の側にも事情がある。不幸な結婚の末、3人の子供と引き離されたエリザベスは、子どもに会いたい一心で、有能者である公爵にすがるわけです。

映画の終盤、ジョージアナがエリザベスに向かって、公爵を「Our Husband」（私た

# 画面の隅々 丁寧に作り



『絵を描いたのは エッセイスト・服飾史家  
中野香織さん  
イギリス文化からモードまで幅  
広いテーマで執筆。著書に『愛  
されるモード』(中央公論新社)  
『ダンディズムの系譜 男が憧  
れた男たち』(新潮社)など。

## アカデミー衣装デザイン賞受賞! 30着のドレスはジョージアナの履歴書

「試写を観たときから（アカデミー）衣装デザイン賞は間違いないなと思いました。マリー・アントワネットや故ダイアナ元妃にも共通しますが、ジョージアナは悲劇をひとつ乗り越えるたびにファッションがより過激に、派手になるんです。美しく装うことで欠落感を埋めようとするのは、女性に共通の心理でしょうか…。そしてフランス革命（1789年）を挟む晩年は、貴族文化が終焉に向かう時期と重なり、ファッションも落ち着いていく。その“変化”をお見逃しなく」（中野さん）



これでもかと盛り上げた髪に、花やリボン、羽飾り（ジョージアナが元祖）をデコレート。もちろんカツラで、メイクは濃いめのチークと付けぼくろがポイント。

ちの夫」と呼ぶよくなります。そこまでに至る複雑かつ壯絶な心の動き、友情といふ生やさしい言葉では表現できない女と女の絆に、心を打されます。

（エッセイスト・服飾史家・中野香織さん）

これで映画がさらに面白い!  
イギリス貴族の基礎知識

### あらすじ



18世紀後半のイギリス。ジョージアナ・スペンサー（キーラ・ナイトレイ）は、世界で最も裕福な貴族のひとり、デヴォンシャー公爵（レイフ・ファインズ）と結婚。しかし夫は妻に冷淡で、男子の後継者を産むことを期待する。夫に愛されないジョージアナを慰めたのが親友のレディ・エリザベス・フォスター（ヘイレイ・アトウェル）だったが、やがて夫はその親友を愛人にしてしまう。傷心のジョージアナは賭け事や政治にのめりこむが、情熱的な愛情を捧げるチャールズ・グレイ（ドミニク・クーパー）が現れて…。

★…イギリス貴族の爵位は「公・侯・伯・子・男」の順。デヴォンシャー公爵は最上位。ジョージアナの恋人・グレイは伯爵ランク。ジョージアナの恋人・グレイは伯爵★…国家に貢献した人物にも代限りの「貴族」の称号が与えられるので、あわせると現在イギリス貴族は2000家ほど★…

最近の貴族は財政難。相続税が払えず爵位を返上したり、代々のカントリー・ハウスを売りに出す例も。ナショナル・トラストに屋敷と土地を寄付し、自分たちの居住スペースだけを確保したり、映画のロケや結婚式場など、有効利用、に乗り出す例も★…故・ダイアナ元妃の生家も例外ではなく、スペンサー伯爵家のカントリー・ハウスではダイアナ・グッズを販売。現当主（実弟）もたまに、商店に登場する。

花嫁衣裳は“ローブ・ア・ラ・フランセーズ”!  
17才の花嫁の初々しさを引き立てるのは、コルセットでウエストをしおり、鳥かごのようなバニエで腰周りを広がらせた、典型的なフランス風のドレス。



撮影／浅沼勲 写真提供／パラマウントピクチャーズ ジャパン amanaimages  
デザイン／エムズスペース 取材・文／逆瀬川由夏